

発音と云えば、黒田魏先生をあげなくてはならない。現教育大学の教授であるが当時は40才前後の少壮助教授で、色の黒い、そして頭髪を美しくわけられた非常な好男子であったが、彫りの深い奥底から、じろりと睨まれる眼の光は一寸気味が悪い。言葉の丁寧な女性的な話し方をされる先生であった。黒田先生は今日では勿論、発音学の authority であるが、その頃から既に発音学の研究者であり、又名声もあった。私達は一年の時に、“Introduction to English Phonetics” という原書を Text に講義を受けたが、実に美しい柔らかな、しかも Natural で正確な気持のよい発音であった。此の Text の附録に Phonetic Sign でかかれた詩や演説があるが、その reading なんかも、到底真似の出来るものでなかったが、‘Jane Eyre’ の ‘All the house was still;’ の one passage を暗記したり、‘Wordsworth’ の ‘Doffodils’ を recite したりしたものである。Pronunciation と Weather との関係については、或る、西館地下室の研究室で、レコードによる model Reading の会があった時、丁度梅雨時分で外はしとしとと降る陰雨で、地下までは雨の音は聞えないが、そのこもった室内では、司会される先生の発音も、平生に倍して美しく響いた。「雨の日は reading や recitation がうまくいくものです。」といわれて、‘Thackeray’ の ‘the Essays on Whitebait’ の ‘I was recently talking in a very touching and poetical strain……’ の one passage を朗読されたが ‘recently’ という先生の美しい発音が、今でも頭に残っている。

発音に加えて会話や Classroom English で有名なのが寺西武夫先生であった。

後述の Mr. Hornby などと共に全国を風靡した所謂、新教授法、Direct method, Oral method の草分けで、私など卒業後、中学に奉職中の8年間は先生の ‘Classroom English’ 3冊を金科玉条として Teaching in English に夢中になったものである。此の寺西教授からは一、二年を通じて Coleridge の ‘Ancient Mariner’ とか Keats 等殆ど Poems 許り習ったが、講義は勿論 English なので微妙な点まで英詩の真髄を体得することは、私のような Poor なものにはできなかったが、その発音は黒田先生同様、柔らかな fluent な English であった。

先生の私達への大きな影響は、英会話への御援助である。会話といっても、天候の挨拶とかいった教本的なものでなく英語による発表力をつけて下さった事である。その一例として、クラス24名を数 Group に分け、Chairman をつけ Group Meeting な組織をつくった。Group Meeting はあらゆる機会、例えば、10分の休み時間とか、昼食時、とかを利用して行われる。大体会話というものは、積極性を必要とし、なんでもいいから、どんどん自分の方から話をしかけて行かねばものにならない。引っこみ思案は禁物である。当時の Classmate の一人などは信州出身で、持ち前の押しの強さで、どの講義の時間中でも、broken English で、どんどん先生に話しかけ最後には、遂々英会話の第一人者になったものもある。所が私などは生来の内気に加うるに、前述のように田舎中学で育て、英語で喋るなんて、たった一度もなかったから、教場で英語で質問するなんて思いもよらない。そういう私には、友人同志による Group Meeting なんかも此の上もない会話の良き練習場となった。

又、寺西先生は、月例的に、Group Meeting の Member を自宅へ夜分よばれ、紅茶をすすり乍ら、楽な気持で英語を喋る機会を与えられた。いつだったか、各大学共同の、

Discussion の大会が、学校の大食堂で行われた時、思いけなくも Chairman に指名され苦勞した事もある。Chairman といえば、一年の時の英語劇で、私共は学生による Oral の授業の公開を舞台にのせ、それを最後に批評する教授も学生がやると云った Performance を行ったが、その際、主役は勿論、授業を実施する学生で、教授はほんの数分批評するだけであったが、その教授の役割を皆から押しつけられた事もある。そして練習中、「よくできました。」という積りで“Quite Well”なんて大きなミスをやり、主任教授の篠田錦策先生から「そりゃ健康のことですよ。Well done！です」と訂正されたりした。いずれにしても、その方面でともかく張切ってやったものだが、高校教師になって、直接英語で喋舌る機会が少なくなった現在、会話などの力が皆無になって残念な気がする。いずれにせよ喋舌る英語の自由な環境をつくって下さった寺西先生には感謝する。同先生はその後長らく病床につかれ死生の巻をさまよわれたが、最近、「英語教育」などに時折執筆されているから大分快くなられたことであろう。御全快の一日も早きことを願ってやまない。

青木常雄先生は中学時代の受験雑誌や参考書などで、その名前はよく知られていたが、私達には一、二年の時は講義を、3、4年の時は主任教授として面倒を見られた。「和文英訳の工夫」等で有名な此の教授は当時50才頃ではなかったろうか。面長な顔で細い眼鏡をかけられ、分けた頭髮の後の分がいつも僅か許り毛が逆立ちして居る。私も頭に「ぎりぎり」が二つあって、後の毛がどうしても、ねない。「ぎりぎり」の二つあるのは、きかん気の性分だと教えられていたが、私はともかく此の先生は恐しく、こわい教授であった。それに当時、口中癌とか何とかで、口の中が痛むらしく、「うがい瓶」を絶えず教場へ持ってこられていた。そんなわけで、不機嫌な時は恐しくて、皆、びりびりしていたものである。入学当初から実に卒業に至るその瞬間まで、私は特に個人的に此の先生には深い思い出がある。それも叱られたこと許りで、今になって思えば懐しいが、当時としては、誠に苦手だったのである。その第一は、入学当初、所謂、教場における初対面の時、どの先生でも新入生の戸籍調査まがいのものをやる。生徒になじむという一面、最初の一時間は授業なしですますと云う面もあることは、その後の教師生活で体得してきたが、青木先生はそれを英語でやられた。大体青木先生の英語は発音専門の黒田教授や或いは寺西先生などとは違って一語一語の発音よりは、全体としての文章本位であり、その喋舌られる速度が恐しく速い。日本語の場合もそうで、低い声で、速く口を動かされる。いわんや英語であるから、さっぱり解らない。何しろ英語で質問をされたのは私には此の時が生れて、ほんとうに文字通りの最初である。なんでも“Where were you born?”とか中学は何処だとか極めて簡単な事をきかれたのだけれど、文字でかかれたのなら、ともかく低い早口では、さっぱり受け答えができない。私の順番がきた時、そうであった。遂にかんしゃくを起した先生は私を、にらみつけて、‘Get away!’とか‘Go away!’とかどなりつけたものである。それでも私は教場は出なかった。何となれば、叱られたことは解ったが、‘Get away’を理解したのは着席して一、二分たってからであったから。当時、青木先生は Text として最初は‘Cuore’を後には Strachey の‘Florence Nightingale’を講読された。殆ど生徒にやらせることはなく、御自分でどんどん paraphrase されていくのである。講義の時は例の低い早口で、眼を恐しく細くされ、微笑を浮かべ乍ら、腰かけたまま講読された。一学期の終り、私は盲腸になり、手術はしなかったが、学期試験は受けられな

く二学期追試験を受けたが、ほんとうに試験をしたのは此の先生だけで、他の先生はレポートその他で適当にやって下さった。青木先生は要するに厳格な教授で、学校の伝説によれば、廊下を下駄ばきで大きな音を立てなが歩いて行った或る生徒（恐らく体育科の猛者と思うが）を追っかけて行って、柔道で、投げ倒したとか云う話さえ残っている。さてその追試験の時、私は恐る恐る、教授室の隣の研究室で待っていると青木先生は例の Cuore の Text を手に入れて来られた。私は入学以来初めての試験の事とて勉強の方法も解らないが、ともかく中学の時のように、訳読だけは充分調べて行った。しかし先生は、内容に関して色々英語の質問をされ、私は英語で答えなければならぬ。散々だった。それに今度は、誰もいない研究室の中で一人対一人で、それだけ、上ってしまい、益々手も足も出ない。おまけに終了後、ドアをきちんと閉めなかったといて追い討ちのお叱りまでうけた。英語で叱られるのは日本語の場合と違って、それ程でないが、英語が一寸解るだけにそれだけ、淋しい嫌な感じがするものである。

第3回目に叱られたのは4年、教生実習最中である。4年の第3学期は私達英語科は東京高師付属中学で実習である。此の付属中学の生徒が仲々難物で、生意気な連中が多い。それに授業法は Oral methaol であるから、実習者の苦労は大変である。私も研究授業もやり、一般授業も数回持ったが、こちらが、二晩一生懸命に教材や Question 等を丸暗記し、どうか一時間の授業をすませ、帰途丁度一緒になった授業のクラスの中学生（二年生）に、冗談に「僕はあれでも二晩、一生懸命勉強したんだぞ」というと彼は「なんだ、それだけかかってあれだけか」と冷笑する始末である。まあどうにか実習そのものは、大過なくいったが、授業のない時はどうしてもさぼりがちである。或日、欠席した。そして翌日出校した時、出席簿はいつも実習生の控室においてあるから、その日の印を押す時、ついでに欠席した昨日の分も押した。誠にけしからんことだが、出欠はたいした事はない形式だという軽い感じがあったのだろう。ところが指導教官の加藤市太郎先生が（私達英語科の4年程先輩の秀才であるが、付中の教官であつた。）偶然前日私に用事があって私の欠席を確認されておったのだ。たちまち引っぱられ叱りつけられた。それですむかと思ったら数日おいて、主任教授である青木教授から茗溪会館によび出され、大叱りを受けた。さすが此の時は英語でなく日本語であつたけれど。私は3、4年頃は英語が嫌になり大学の教育学部へ入るつもりでその方許り勉強していたので、そんなことなども含めて大眼玉を食った。しかし卒業式の後、青木教授の自宅を訪問した際は、そうした思い出等も合わせて、英語教師としての使命と自覚と、今後の教師生活への御指導を受けた時は非常に慈父のような気がしたものである。青木先生は3、4年の時の主任であつたが1、2年の時は、篠田錦策教授が主任であつた。当時60近くであつたらう、実に温厚な老紳士で、refine された典型的な Gentleman tipe である。言葉使いも丁寧で、私達は最初「貴方」と呼ばれた時は面くらった。Text の中に出てくる人物についてもすべて敬称をつけられ Ruskin さんはこうだとか、Arnold さんはどうだとか始めは一寸奇異な感じがした。一年の時は Ruskin の 'Sesame & Lilies' 二年の時は Arnold の 'Culture & Anarchy' その他二、三の essay を教わった。授業法は Oral English であつたがむつかしい所は日本語をまじえ、それに Question & Answer が多かった。又同先生は二年間作文を持たれた。大体和文英訳については、私は中学校時代の予想では、恐らく入学したら和英は、相当むつかしいものを叩きこまれるだろうと思っていたが、入ってみると案に相違して東京高師英語

科4ケ年を通じて和文英訳なんて一回もやった事がない。しかも自分で中学の受験時代以上に英語で発表する力を得た事を自覚した。何故だろう。それは4年間のあらゆる英語授業を通じて、特に和英という形式を取らなくても、知らず知らずに英語の表現を学び取ったからであろう。篠田教授の英作文は和英ではなかった。自由作文 Free Composition である。私達は、辞書もノートもなしで同先生の教場に出る。先生から紙が渡される。黒板に題目をかかれる。‘My native town’ とか ‘How did I spend yesterday ?’ とか。

私達はその時間の中に英語で題目についてのまとまった文章をつくる。く時間が少いから日本語で考え英語に Translate する暇などはない。最初から英語で考えていかねばならない。Thinking in English である。なれない申は大変だった。辞書を見てはいけなし、ともかく自分の知っている範囲内の英語で作っていかねばならない。ベルになると提出、次ぎの作文の時間内に A. B. C. の mark をつけ、添削されて返して貰う。しかしなれてくると、一年の終り頃には発表に相当な自信を持つようになる。新聞、雑誌をみても、すぐ英語の文章が浮んでくる。どんな表現のむつかしい日本文にあっても、何とかその意味を伝える英文を考え出す。是は、なまじっか和文英訳の練習よりも威力がある。教師になって、生徒に作文を教える場合、どれだけ、助けとなっているか解らない。唯、教師としては10人10色の各生徒の作文を添削する苦労が大変なのである。若し労を惜しまず、せめて高校生あたりの段階でやったら、どんなに生徒にとって苦手の作文が楽に、そして面白い興味あるものとなるであろう。高師における一年先輩で現金沢大学助教授の中川友吉先生は、私と一緒に旧金沢高師付中に奉職時代よく労を厭わずやられたものである。篠田先生の Free Composition は私にとっては4年間の学生生活の大きな収穫であった。

英文法は大塚高信教授から4年間習った。現在、確か関西学院大学におられる大塚先生は今日では大塚文法として有名であるが、当時既に英文法界の壮年教授として、名声のある先生であった。大柄ではないが、ギリシャの彫刻を思わせるような、きりっとしまった顔に黒いロイド眼鏡をかけられ、何よりの特徴は広い額の中央に縦に皺をよせられ講義される先生の容貌は如何にも文法学者らしく、私達学生の崇拜の的であった。Sonnenschein の ‘A New English Grammar’ 3巻、Onions の ‘English Syntax’, Nesfield の ‘Rhetoric’ 等を講義される。先生の講義は一応、その Text を材料としての批判文法であって、

Sonnenschein の文法定義など先生にかかれば矛盾だらけでそれに附随して Jespersen をはじめ、色んな文法学者の名前や文法論が展開してくる。実に内容のある講義であった。英文法の世界に対する広い視野と、批判の仕方とを教えて下さった立派な先生であった。講義の方法そのものには別に妙味はなかったが、内容と学問の故に学生の尊敬を集めた人気のある先生は大塚先生が最高であったであろう。

人気といえば、今一人忘れることのできない先生があった。渡辺半次郎教授で通称「渡半」氏である。大塚先生が学者タイプで人気があったとすれば、渡辺先生はその特異な個性の故に皆に愛され好かれた。座高の非常に高い、そして頭の大きく長い、髪はロマンス・グレイの人で、しかし風貌にはそんなロマンチックなものは、みじんもない豪傑肌。そして声が、途方もなく大きい。‘Idle Thoughts of an Idle Fellow.’ や ‘If I may’ それから上級になっては専ら Shakspeare の ‘Merchant of Venice’ や ‘Hamlet’ 等の classic なものの講義だったが、生徒が訳訳すると、大喝一声、「バカヤロウ」が、飛んで来て、バリ雑言、そして後で、象の様な眼を細くして、「ニヤリ」と破顔する憎めない恐

しいがユーモアのある先生で、いつも風呂敷に本を入れて教場に入り、Textと一緒にカードを教卓に重ねる。是は OED の抜粋なのである。先生の授業は OED 一点張りである。だから此の先生の授業への下調べといえ、私達は学校の図書館へ行って13冊もある広大な OED と取りくまねばならない。おかげで卒業後も OED を引き、又それの人知れない親しみを持ち続けている。

OED のある処、いつも同先生の面影がつきまとう。先生はユーモアで時々「自分は従四位であるぞ」といって、まじめになって自慢されていた。伝説によれば、生徒が信用しないので、従四位の辞令？を教室で、うやうやしくかかげたことさえあるといわれている。

当時、西脇順三郎教授が慶応大学から私達へ出張授業にきておられた。‘Paradise Lost’を3巻まで、1、2年で教わり3、4年は専ら、先生の得意の古代、中世英文学史であった。フランス人を細君にもたれた先生はどちらかと云えば、Cosmopolitan であり、又詩人として、その頃も今日も名声が高い。細い身体であるが、実にきりっとしたスマートという形容詞のびたりする先生で、口を小さくあけて低い声で話される gentleman で当時既にロマンス・グレイがかかっておられた。しかし40代であつたらう。

同じ文学史の教授で西脇先生と対象されるのが、福原麟太郎先生である。今はもう功なり名遂げて退官され先生独特の妙味ある随筆等をよく出版されているが、先生はその頃から大変肥えておられ、顔は福々しく、二重あごで、小柄な体を歩かれるのさえ、重たげな様子であった。主として18世紀以降の近代英文学史であったが、いつもポケット版の小さい原書の文学史を持って教場へ入られるが、一度もその本は見られず、教卓におきっ放し御自身は窓辺によりそい、ぼつりぼつりと口重く喋舌られる。「咄弁の雄弁」とは同先生のことであろうか。甘いも酔いもかみ分けた何処かの、柏父さんが世間話をする様に、きれぎれの断片的なその講義が、ノートをとってみると、実によく推敲された名文である事を知って私達は驚いたものである。先生の試験は、英文の文学史 one passage が出て、その中における人名、地名等の個有名詞や年号等に註釈をつけさせることであり、いつもその形式のテストであった。それだけにやり甲斐のある勉強であつたのである。

その他、Mr. Hornby には4年間、徹底的に新教授法の Drill を受けた。先般新教授法の御大である Hornby 氏と最近喧しくなって来た Michigan Methool の御大である Dr. Fries との対談が「英語教育」にのっていたのをみて懐しく思われた。

考えてみるに、教育とは決して routine なものではなく、又、教師は Teaching Machine ではなく、それぞれの個性を発揮すべきであり、その意味においても、私が指導を受けた名教授方の昔の講義を参考に有効な教育指導に専心したいと思う。

